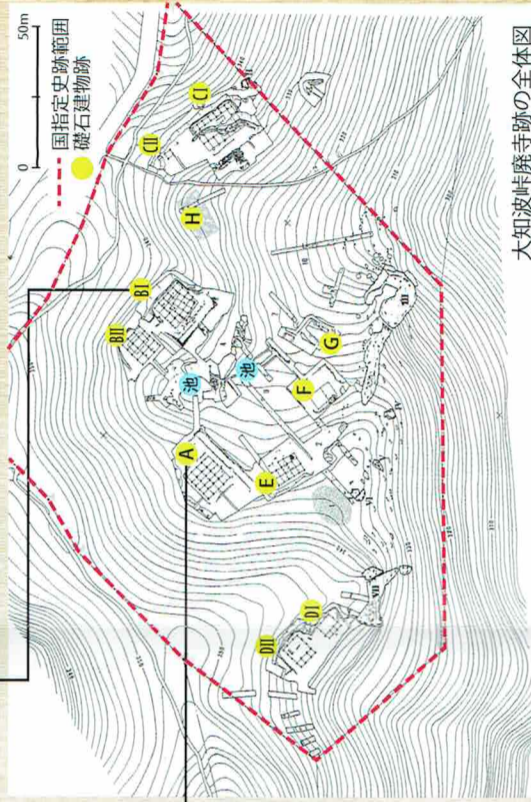


大知波峠廃寺跡



大知波峠廃寺跡想定復元図

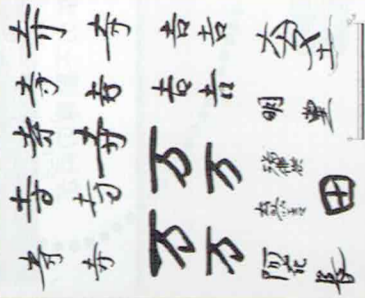


大知波峠廃寺跡の全体図



発掘された礎石建物跡B1

↓出土した土器と墨書土器に記された文字



▲出土した墨書土器

古代と中世のはざまに

大知波峠廃寺跡は、遺構・遺物の保存状態がよく、境内や建物の詳細が分かる平安時代の山寺として、重要な遺跡となつています。主要仏堂が随時加わり僧侶たちの修行の場である伽藍を構成していくあり方は、磐座(神の鎮座する所)・若水(元旦に初めて汲む水、一年の邪気を除くという)・水分信仰から発展したものであり、七堂伽藍のような規格化された寺院の対極にありま

座頭宮の伝説

昔、僧形の盲人が肩に琵琶をかけ、杖をついて、三ヶ日方面から大知波に迷い込み、村に入って、村から山にと道をたどり、毛古谷の一本杉の木の下で休んでいた。ちようど山から村人が来てこの木陰に休み、二人は話をしたところ、座頭は「豊川に行きたいがどの道を行たらよいか。」と尋ねた。村人は「盲だから面白い意地悪をしてやれ」と、山路をわざと豊川道だと教えた。

「其処に谷川がある。川をわたると道は左右に分かれている。左が豊川道、右が山路だ。」と教え、座頭は言われた通り、左の道を行き大木の杉山に迷いこんでしまった。

幾日か過ぎて、梅雨時の大雨が降り、谷川は大水が滔々とながれていった。そして、下流の曲がり角の崖の高い所に琵琶が懸っていたので、人々は此処を琵琶崖と呼び今日に及んでいる。この事があつてから、村人の一族に眼を患う者が続出し、誰言うとなく「これは座頭の祟りだ。」「座頭を死に至らしめた罰だ。」と言われるようになった。

一族も前非を悔い、座頭の冥福を祈るため、村外の山に祠を建て此処に祀り、座頭の宮と呼んだ。

そして毎年12月1日に、一族で白オコワを炊き、モツソウ(塩にぎり)を作り、人々に振る舞って供養し続けた。一族に眼を患う者はいなくなつたという。

文献に出てこない

幻の山寺

大知波峠廃寺跡は、静岡県と愛知県の県境となっている浜名湖北西部の湖西連峰にあり、3.7haもの広さの緩斜面に建物跡が広がっています。大知波峠廃寺跡に関連する古文書や伝説は残されておらず、文献に出てこない「幻の山寺」です。

平成元年から7年間にわたって行われた発掘調査では、10世紀中頃(平安時代)から11世紀前半にかけて建物が建立・整備され、11世紀末に衰退したことが明らかとなりました。その後、12世紀後半に再び山伏の修行の場となりました。大知波峠廃寺跡からは、小谷を石垣で堰き止めた上下二段の池跡を中心に、仏像を安置するための須弥壇のある仏堂や、居住建物や門跡など12棟の礎石建物跡が発見されました。出土遺物は六器(密教法具の一種)や花瓶・鉢などの供養具や、灰釉陶器・



出土した様々な土器類



出土の緑釉陶器

出土の灰釉陶器
緑釉陶器・土師器の碗・鍋などの日常生活具が数多く出土しています。また、池からは、杭列や湧水遺構、水槽、蘭伽井(仏前に供える水を汲む井戸)など水に関連する遺構とともに、約445点もの多量の墨書土器や木製品が出土しました。



廃跡



山頂からの眺めは絶景!



湖西市教育委員会 スポーツ・文化課
(TEL 053-576-1140) 2019年版



炭焼き窯跡

大知波峠 炭焼き窯跡
平坦な林道が続く



鍋割りの水

湧き水を鍋にとれば水の冷たさから、鍋も割れるという言い伝えがある。



石垣跡
道の両脇には水田の柵跡である石垣がいくつも見られる。農民が田租の酷税からのため、役人の目の届かない山奥に「隠し田」を作っていた跡。



不動ノ滝

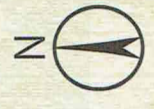
滝の上には、雨乞い神事の不動尊の祠が祀られている。

不動ノ滝
AコースとBコースの分かれ道

所要時間 (大人徒歩・片道)
知波田駅 ▶ おちばの里親水公園 約60分

Aコース
おちばの里親水公園 ▶ 不動ノ滝 ▶ 廃寺跡 約80分

Bコース
おちばの里親水公園 ▶ 廃寺跡 約45分



歴史の道を歩こう

